

吃音への理解深める

城北小4年

城北小学校の4年生(22人)は17日、言葉が滑らかに話せない「吃音(きつおん)」への理解を深める授業を受けた。クラスに吃音がある女子児童がいる



児童が内藤さん(中央)と一緒に吃音について考えた

ことから企画。松本市の神應透析クリニックの言語聴覚士内藤麻子さん(51)から吃音の人の接し方を学び、友達を思いやる気持ちを強めた。

内藤さんは、吃音の特徴として語句を連発したり、伸ばしたりすると説明。100人に1人の割合で症状が出

るといい、「みんなが知らないだけで多くの人が吃音なんだよ」と伝えた。

しゃべり方については「緊張しているわけでも、話すのが苦手なわけでもない。話し方が違うだけ」と強調。「どもるのが一番自然な話し方で、そうならないようにすると話さなくなる。相手の話し方を気にするのではなく話の内容をしっかりと聞いて」と訴えた。

授業では吃音がある女子児童が作文を読む場面も。クラスメートに「来年、城北小と高島小が一緒になって上諏訪小になる。そのときに、私のことを知らない人が話し方を不思議がっていたら、吃音だと教えてあげてほしい。そうして吃音のことを知る人が増えてくれたらうれしい」と呼び掛けた。